北から南から

児童の自助意識を自然に育む “娯楽型”防災キャンプ

東京都三鷹市五小オヤジの会

1 子どもたちにひと夏の思い出を

災害時に避難所となる学校に、在校する全学年の児童と父親が一泊する一大行事。それが、東京西部の井の頭公園近くにある三鷹市立第五小学校で、15年前から毎年行われてきた「楽しく防災！ 五小キャンプ」です。在校生の父親で組織する「五小オヤジの会」が、学校側の協力を得ながら、手弁当で準備から実施までを担っています。当初は「子どもたちにひと夏の思い出を作ってあげたい」というオヤジ有志の熱い思いから構想が練られ、防災関連のほか、様々な娯楽イベントを楽しみながら学校で過ごし、教室や体育館、テントで宿泊する今の形が定着。災害時の避難に備え、児童を学校での寝泊りに慣れさせる狙いもあります。

2 組織化された班活動で運営

夏真っ盛りの快晴の空の下、今年も伝統の五小キャンプは実施されました。参加児童は全校生徒の9割に及ぶ総勢約500人。集まった運営側のオヤジは実に140人以上。特徴は、本部を中心に役割別に多様な班を組織していることです。

参加者の夕食用に大量のカレーを“炊き出し”する「カレー班」、ご飯を炊く「飯炊き班」、校庭に高学年の宿泊用テントを張る「テント班」、翌朝、備蓄品のアルファ米を参加者の人数分用意する「朝食班」など、防災を彷彿させる活動を担う班が多数に上ります。

カレー班のオヤジたちが850食のカレーをつくる

夕食時のカレーの“炊き出し”には
児童や保護者が並び、長蛇の列

児童に娯楽を提供して「楽しく」を体現する班も組織化。競技や遊びのイベントを催す「わくわくオリンピック班」、学校をお化け屋敷にする「肝だめし班」、映画を上映する「映画班」、科学を楽しむ「実験・天体班」、ものづくりに挑戦する「クラフト・ジュエリー班」、バンド経験者が一夜限りのライブを披露する「オヤジバンド班」など、こちらも盛りだくさんです。

さらに、裏方では、校内の安全を監視する「警備班」、各班が使う備品を手配する「備品班」などもイベントを支えます。様々な班に割り振られたオヤジたちは事前に打ち合わせや準備を重ね、イベント当日にそれぞれの持ち場で力を発揮することによって、五小キャンプは成り立っ

ているのです。

一方、三鷹市の消防署、消防団の協力を得て、児童の防災体験にも注力。模擬消火器を使った消火訓練、疑似のドライスモークを発生させた煙体験ハウスでの避難訓練、筒先から水を出すホースを持つ操法体験など多岐にわたります。

消防署や消防団の協力を得て、児童は操法も体験する

3 最優先課題が“熱中症の防災”

こうして万全の体制によって実施される五小キャンプですが、実は、時期的に大きな懸念材料があります。猛暑から児童を守るための「熱中症対策」です。特に今年は気象庁が「災害」と形容するほど暑さが厳しく、まさに“熱中症の防災”が最優先課題でした。

運営側で取った対策は主に３つです。まず、体育館に設置する業務用扇風機の台数増加、校庭にミストシャワーが噴霧されるエリアの特設など、機材での対応。加えて、通常体育館で行うオヤジバンドをエアコンのある音楽室で開催し、宿泊も体育館を中止してエアコンのある教室に切り替えるなど、場所の変更。そして、特に力を入れたのが、児童への水分補給の声かけです。「水分を摂って」と、オヤジ全員がしつこく呼びかけて補水を促し、水筒が空の児童を探しては大型のポリタンクから麦茶を補充。児童の間でも意識が高まり補給頻度が増え、そうした活動もあって、熱中症による事故を防ぐことができたのです。

高学年は校庭に張られたテントで宿泊。
今年は熱帯夜だったため、希望者は教室で就寝

4 未来のオヤジにバトンを渡す

様々な事態を乗り越えながら、今年も無事に完結した五小キャンプ。児童が笑顔で過ごせたことがオヤジたちにとっては何よりの喜びです。同時に、児童が娯楽を楽しみつつも、学校での宿泊や炊き出し、防災体験、熱中症対策などを通じ、災害時の行動や身を守る意識が自然と育まれることも醍醐味です。

組織化された運営体制であるものの、オヤジは任意参加であり、「できるオヤジができることをやる」のが基本ルール。また、児童が卒業するとオヤジも会から卒業するため、組織が固定化することなく、リレーでバトンを渡すように、毎年世代交代がなされていきます。児童を思う気持ちから始まった五小キャンプですが、これからも未来のオヤジたちに受け継ぎ、息長く続けていければと思います。

朝食は、三鷹市から提供された賞味期限が
近い備蓄品のアルファ米をオヤジたちが用意